「真の愛の起源地」に関して

韓国統一思想研究院院長　李相憲

序論

ご父母様は、一九九〇年四月九日から十三日まで、ソ連のモスクワで開催された第十一回世界言論人会議を成功裡に終えて、ゴルバチョフ大統領と単独会談をされるなど、驚くべき勝利を収めて、錦を故郷に飾られた。

その後、韓国の十二カ都市に三十万の群衆が集り、勝利された真の父母様を歓迎するために開催された十二回の大会に親しく参席され、「真の愛と統一世界」という主題の講演をなされ、聴衆に大きな感銘を与えると同時に、熱狂的な拍手喝采と天地が振動する万歳の歓呼を受けられた。モスクワ大会の勝利に続き、また一つの目覚ましく偉大な経綸を広げられたのである。

ところで講演内容の中にはとても貴重な部分が多かった。特に「真の父母様」、「愛の起源地」、「愛の九〇度の角度」等の概念は、永遠に深く吟味されなければならない重要な教えであった。そこで大会が終った現在、同講演内容をもって国民大衆を啓蒙しなければならない必要性を感じ、これらの概念をたやすく解説しようとしたのである。本論文では「真の愛の起源地」を扱うことにする。

本論

ところで「真の愛の起源地」に関する教えを正確に理解するには、「愛」それ自体に関する正確かつ原理的な理解

が必要である。すなわち、統一原理の立場から「愛」に関するすべての関連事項を詳細に調べてみる必要があるのである。それで本論では、「愛とは何か」、「真の愛と異性の愛」という二つの題目をもって、愛に関するすべての事項を調べながら、最後に「真の愛の起源地」について説明することにする。

I　愛とは何か

(1)　原理からみた愛の定義

「真の愛と統一世界」というお父様の講演題目が示しているように、「人間は誰も統一を願っているが、統一はただ神の真の愛によってのみ可能である」というのがその教えの要点であった。したがって、この教えを深く理解するには、「愛」の概念それ自体をまず正しく理解しなければならないのである。

『原理講論』には「主体が対象に授ける情的な力を愛という」とされており（七二ページ）、『原理解説』には「分立された二性［陽性と陰性］の対象実体［男と女］が再び合性一体化せんとする力が愛である」（三二ページ）とされている。また「それで人は妻と結び合い、一体となるのである」（創世記二章二四節）という記録もある。

ここで合性一体（合性体）（『原理講論』五五、五六ページ）（『原理解説』三二ページ）の本来の意味は異性（男女）が合して一つの体を成すことをいう。創世記二章二四節に「それで人はその父と母を離れて、妻と結び合い、一体となるのである」とされているように、合性一体（合性体）とは、異性（夫婦）が合して一つの体（一体）となる、そのような合性一体なのである。（註参照）

（註）ここの「合性」とは男女が合するという意味の概念であって、統一原理でのみ使われる用語であり、一般的にはあまり使用されないので、辞典にもない言葉である。しかし統一原理では、次にみるように異性（男女）間でない単純な主体と対象が合して一体となる場合も、合性一体と表現している。この時は一般的に使用される「合成」または「統一」と同じ意味なのである。

(2)　愛における力とは何か？

愛の定義にある「情的な力」、または「分立された二性

の実体対象が合性一体化しようとする力」とは具体的にはいかなる力なのであろうか。その力は、主体と対象が互いに相手に与えようとする力なのである。互いに与えることによって一体になろうとする力なのである。

しかし、これは単純な物理学的な力ではなく、情的な力なのである。情的な力とは、相手に温情を施して相手を喜ばせることによって、自身も喜ぼうとする心の力である。それでは、そのような温情を施さざるをえない動機は何か。

それは、各被造物は、本来、愛の主体（本体）である神の中で主体と対象の関係にありながら心情の力（愛）によって一体となっていたが、創造と共に、それぞれ主体と対象の位置に分立されたからである。特に男性、女性がそうである。男と女は、それぞれ陽と陰として、神の中では心情の力を中心として合性一体を成していたのである。

その陽性と陰性が、創造と共に男性と女性に分立されたのであり、したがって心情（情的な衝動力）によって、一体を成していた本来の姿に戻ろうとする衝動が生ずるのである。そのようにして、一人の男と一人の女が、その情的な力によって一体（合性一体）となれば、すなわち結婚して夫婦が生活をするようになれば、本来の姿に戻ることになるのである。

(3) 主体と対象の合性一体化

男性と女性の合性一体化は最も典型的な合性一体化であるが、その他にも合性一体化の例は無数に多い。

『原理講論』には「またその対象が、このような主体と合性一体化するようになるとき、はじめてその合性体は、神の二性性相に似た実体対象となる」（五五、五六ページ）、「体は心の対象として、心と相対基準をつくって授受作用をするようになれば……合性一体化する」（五七ページ）、「太陽と惑星などは合性一体化して太陽系をつくる」（五六ページ）、「原子を形成している電子が……陽子を中心として授受作用をするようになれば……合性一体化し、原子を形成するようになる」（五七ページ）等の表現もあるが、ここでいう「合性」は男女の合一とは関係がなく、性相と形状、陽性と陰性、主要素と従要素等の相対的要素、すなわち主体と対象の相対的要素の合一を意味する。

そのようにして、父母と子女の間にも授受作用による合性体が形成され、兄と弟、友人と友人、君主と国民、上官と部下の間にも主体と対象の授受作用による合性一体化が

成され、動物相互間、植物相互間、動物と植物の間にも、そして鉱物相互（分子・原子）にも、このような授受作用による合性一体化が成されるのである。

ところで、ここで「万物には物理的な力が作用しているのみで、情的な力、心の力は作用していないのではないか」という疑問が生ずるかもしれない。しかし、お父様の教えによれば、万物相互間にも、人間の場合とは程度の差はあるが、心（したがって情的な力）があるということであり、実際、植物や鉱物にも心があると主張する科学者が増加している。

万物は例外なく理法（Logos：理性と法則）によって動いている。理法の理は、理性であり心であって、その中に低次元ではあるが、情的要素が含まれていることを意味している。このような理法による授受作用は人間の場合にも適用される。

人間が社会生活を営むのに際し、意図的に他人を愛しながら生きる場合ももちろんあるが、会社では社則に従って、学校では校規に従って、家庭では家法に従って習慣的、機械的に生活する場合が多い。

しかし、このような機械的な規範生活も、それが可能なのは、人間の本性の中に愛が宿っているからである。言い換えれば、社員や会員がただ習慣的、機械的に規範（規則や規律）を守り、会社や団体がよく団結すれば、それもやはり愛を中心とした（無意識的な）授受作用によって合性体が成されたからなのである。

このようにして、「主体と対象が愛し合うことによって（愛を中心とした授受作用によって）合性一体化する」ということは、人間を含めて全宇宙を貫徹する普遍的真理であるということを知るようになる。したがって、これによって「愛は主体と対象を一つに結合（合性一体化）させる情的な力である」ことを知るようになると同時に、特に人間においては、「愛は主体と対象が互いに温情を施しながら、相対を喜ばせることによって、一体となろうとする心の力」であることを知るようになる。

Ⅱ　真の愛と異性の愛

次は真の愛と異性の愛に関して、原理及び、お父様のみ言を中心として調べることにする。今回、お父様の講演で聴衆に特異な印象を与えたのは、「真の愛」、「真の生命」、

「真の血統」、「真の父母」等の用語と、異性間の愛に関係する器官、すなわち「性器」という用語である。

このような用語は、常識的にはその深い意味を理解するのが難しいので、その正確な理解を助けるために、「真の愛」と「異性の愛」という小題目をもって解説しようと思う。

(1) 真の愛

今回のお父様のみ言において、「真の愛」、「真の生命」、「真の血統」は「偽りの愛」、「偽りの生命」、「偽りの血統」の用語と対比して使用されている。したがって「真の愛」の「真」は「偽り」と反対の概念であるのはもちろんである。ここの「真」は永遠不変性を意味し、唯一無二性を意味する。したがって、存在の世界で最も根本となる真の存在は神のほかにはない。神は絶対者であり、神のほかには永遠不変、唯一無二の存在はありえないからである。

したがって神の属性も真である。神の本性相と本形状も、神の本陽性と本陰性も、永遠不変の「真」の属性である。神性も神の属性であるゆえに、神の心情、愛、ロゴス、創造性もすべて真の属性である。したがって「真の愛」は正に神の愛、すなわち神の絶対的愛である。

それでは「真」と反対の「偽り」はどんな意味であろうか？　お父様の演説文の中の「偽り」は、「真でないのに真であるかのように偽装すること」をいう。したがって、真の愛が「真の存在の愛」であったように、偽りの愛は「偽りの存在の愛」なのである。

それでは「偽りの存在」とは、いかなる存在であろうか？　それが正にサタン、すなわち堕落した天使長（ルーシェル）なのである。サタンであるルーシェルは、被造物であるにもかかわらず、あたかも創造主であるかのように「この世の王」となって、六〇〇〇年間、人類社会を支配してきた。したがって偽りの愛とは、サタンの愛と、サタンが中心または動機となって生じた人間の愛なのである。

これに反して、真の愛は神の愛であると同時に、神が中心となって生じた愛を意味する。「サタンが中心となった愛」すなわち偽りの愛と、「神が中心となって生じた愛」すなわち真の愛はその方向が全く違う。

偽りの愛は、自分だけを大切にしようとする利己主義的な愛であるのに対して、真の愛はかえって自己を捨てて、ただ他人（隣人、兄弟、氏族、民族、国家、世界等）を大切にする愛、他に与える愛、すなわち利他主義的な愛なの

である（註参照）。

（註）お父様は一九九〇年六月二十六日～二十九日の四日間、韓国の光州、釜山、大田、ソウルの四カ都市で開かれた「訪米研修団特別集会」で、神の愛を、特に「為他主義的愛」と呼ばれて、「為他主義」という用語を用いることを勧められたのである。

神の愛は不変の愛であり永遠な愛であるために、これを原理的な愛であるともいい、サタンの愛は非原理的な愛であるともいう。ところで『原理講論』には、「堕落人間は、神もサタンも、共に対応することのできる中間位置にある」（一一〇ページ）、「堕落直後、まだ原罪だけがあり、他の善行も悪行も行わなかったアダムとエバは、神とも、またサタンとも対応することができる中間位置におかれるようになった。それゆえ、アダムとエバの子孫たちもまた、そのような中間位置におかれるようになったのである」（一七二ページ）という記録がある。

したがって、このような人間たちは、神側の真の愛もサタン側の偽りの愛も実践することができないのに、実際には、夫婦間の愛をはじめとして、様々な利己的及び、利他的な愛を行っているとみなければならないのである。

ここで、そのような愛は何の愛であるかという疑問が提起されうるであろう。しかし、このような人間は、いつも中間位置にだけとどまっているのではなく、時には善神に引きずられ、時には悪神に引きずられながら、ある時は利他的な愛を、ある時は利己的な愛を行うようになる。

その時、善悪の判断の主体は良心であり、良心の主体は神である（同上、五三ページ）。ゆえに、良心にしたがって愛の生活をしたならば、その愛は神中心の愛になるのであり、良心に逆って愛を実践すれば、その愛はサタン中心の愛になるのである。この時、人間が神を知っているか否かは別問題なのである。

次は、原理的愛と非原理的愛、そして被造世界の愛に関して論ずることにする。愛の力には原理的な愛の力と非原理的な愛の力があるが（同上、一一七―一一八ページ）、堕落は非原理的な愛の力によってなされ、復帰は原理的な愛の力によってなされるとされている（同上）。ここで「原理的な愛」とは、正に神の真の愛であることはもちろんである。

ところで、被造世界には堕落と関係のない愛があることを我々は知っている。すなわち、鉱物世界、植物世界、動

物世界にも、人間世界と同じように（ただ次元が違うだけ）愛が作用している。お父様が講演された内容にもその事実がよく表われている。

「被造世界をみると、鉱物世界、植物世界、動物世界、人間世界までも、みなペア・システムになっていることを見ることができます。元素同士においても相対的要因が合えば、神もその結合を止めることができないのです。レベルは低いけれども、鉱物世界の作用も愛の創造理想型モデルの核に反応できるように造られているのです。それゆえ、真の愛の本質を中心とすれば、堕落しない人間の心情と、さらには万物、動物世界まで通じるようになっています。その位置に入っていけば、岩とも通じます」（「真なる愛と統一世界」）と表現されている。

また、モスクワでの第十一回世界言論人会議の基調講演文（「真の統一と一つの世界」）にも、この事実がよく表れている。「宇宙万物を見れば、すべての存在が陽性と陰性の二性性相による相対的関係を結ぶことによって存在しているのを知ることができます。これは鉱物の次元からはじまって、すべての場合に適用されます。創造主は万物を陽性と陰性に区分して創造されることによって、これらが互いに愛の授受を通して結合するようにされたのです」。

このように鉱物、植物、動物の世界にも、愛が作用しているのは明白であり、その愛の起源が神の愛であることもまた明白である。すなわち、万物に作用している愛も原理的愛であることは間違いないのである。ここで、万物世界に作用している「原理的愛」と、人間世界の「原理的愛」が同一の愛であるか、そして原理的愛と真の愛とは違うのか、またどのように違うのか、という疑問が提起されうるであろう。

(2) 人間と万物の原理的愛と真の愛

次に、このような問題に対して説明することにする。まず、人間と万物の原理的愛を説明する。人間世界の原理的愛と万物世界の原理的愛は、神から由来したという点で同じであるが、次元においては違っている。

愛とは、要するに主体と対象（すなわち性相と形状、陽性と陰性）が情的な力を授受する現象をいうのであって、その時の主体と対象が、人間の場合と万物の場合では次元が違うのであり、それゆえ愛（原理的な愛）にも相違が生ずるようになる。

鉱物において、陽性と陰性の主体と対象は陽イオンと陰イオンであり、性相と形状の主体と対象は物理化学的作用性と原子、分子等である。植物において、陽性と陰性の主体と対象は雄しべと雌しべであり、性相と形状の主体と対象は生命と細胞、組織である。そして動物において、陽性と陰性の主体と対象は雄と雌であり、性相と形状の主体と対象は肉心と肉体である。

ところで堕落しない人間において、陽性と陰性の主体と対象は人格を完成した男性と女性であり、性相と形状の主体と対象は心と体である。そして人間において、主体と対象である心と体には三種類がある。動物のように肉心と肉体としての心と体もあり、霊人体と肉身としての心と体もあり、生心と肉心としての心と体もある。お父様が、心と体が一つにならねばならないと強調している時の心と体は、霊人体と肉身、生心と肉心の意味をもった心と体なのである。

このように、同じ原理的愛といっても、人間のそれと万物のそれは主体と対象の次元が違うために、その愛の質（性格）も次元が違うのである。人間の愛には情的要素と自由の要素が豊富だが、万物においては、その次元が低いほど、この二つの要素が少なく、鉱物では二つの要素は痕跡的に現われているだけである。

次に人間における真の愛と原理的愛の概念の違いを説明することにする。人間において、真の愛と原理的愛は神から由来した愛であるという点では、神の愛と同じである。しかし、真の愛は偽りの愛に対する反対概念であり、原理的愛は非原理的愛に対する反対概念である。

したがって、真の愛は偽りの存在であるサタンを否定するのに力点をおいた概念であり、原理的愛は神の真理（みことば、原理）に力点をおいた概念である。すなわち、真の愛や原理的愛は人間堕落のために生じたサタンを中心とした愛、すなわち世俗的な愛と区別するために呼ぶ、神の愛の別称なのである。

人間堕落がなかったならば、「神の愛」があるだけで、真の愛や原理的愛という用語は出てこなかったであろう。それはあたかも、堕落がなかったならば、信仰も宗教も必要でなかったというのと同じである。以上で「人間と万物の原理的愛と真の愛」の項目の説明を終えた。次に異性の愛を扱うことにする。

（つづく）